

足立万寿子

『エリザベス・ギヤスケルの小説研究  
—小説のテーマと手法を基に』

東京：音羽書房鶴見書店、2012、4,600円、xv + 576頁。

中井真理子

著者は、2001年に『エリザベス・ギヤスケル—その生涯と作品』を上梓され、本書はその姉妹編である。20年にわたるギヤスケル研究の集大成で、全長編小説と中・短編小説中の7作が取り上げられる。構成は、序章、第I章（作者とユニテリアニズム）、第II章から第X章（長、中、短編小説の論考）、終章である。紙幅の関係以上に評者の力量が及ばず、全体像をお伝えできないことをお許しいただき、序章、第I章、第X章を除く長編小説を扱った章を取り上げたい。

序章では、主として研究着目点と研究方法が述べられる。特にギヤスケルとキリスト教についてはユニテリアニズムとの関連性に着目し、男尊女卑的な時代思潮とは異なる作者の人間観が作品中にいかにも具現化されているのかを、次の4点すなわち 1. ユニテリアンとしての信仰 2. イエスの言動を模範にした愛の実践 3. 男女間の差別を認めるダブル・スタンダードへの疑問と抗議 4. 女性の自立により考察される。具体的には、L・T・ディキンソン氏の小説論（小説の構成要素は「テーマ」と「手法」）に基づいて分析される。

第I章 エリザベス・ギヤスケルとユニテリアニズム

ユニテリアニズムの教義が紹介される。つまり、彼らの考える神は三位一体としての神ではない。神は「一つの位格」とし、子と聖霊は「その従位にあるもの」であり、子すなわちイエスは「神に是とされた」人間とし、「聖霊」は「人間を通して働く神の力」である。著者によれば、作者は「人はこの世で、神を信頼し、家族を含め社会の人々のために尽力し、かつ自分のためにも生きてこそキリストチャンとしての人生を全うするという人間観、人生観を抱いていた」ということになる。

### 第 III 章『メアリ・バートン』 第 2 節『メアリ・バートン』に描かれた労働問題

本章では「労働問題」と「転落女性問題」が扱われるが、前者を取り上げる。作者は「鋭い観察力と卓越した表現力」で労働者家庭の惨状を描写する。ウィルソンの姉アリスはバートンと異なり、己の不運を嘆かない。それは彼女が＜敬虔で善良な＞人間であり、「心に常に幸せの象徴ともいえる田舎」を持っていたから、と著者は考える。彼女の臨終は、＜もう一度幸せな子ども時代に戻り、あんなに何度も帰りたいと願っていた美しい北部の田舎に再び住まっていた＞と描かれる。一方、バートンは組合に加盟し、チャーティストとなり、国会「請願」が拒絶されると、ハリー・カースンの暗殺を企て、実行犯となる。組合活動はアヘン同様、現実の苦しさを忘れさせる「現実逃避」となっていると著者はいう。「考える」労働者バートンはアヘン常習者となり、「考える」力を奪われて転落するのだ。「良心の呵責」にさいなまれ、臨終でカースンに大罪を告白し、ジョウブ・リーには「聖書」の教えに背いてから墮落した、と告げる。カースンも同夜、長年放置した「聖書」を取り上げる。バートンは、彼が語る聖句「わたしたちの罪を赦してください。私たちも自分に負い目のある人を皆赦しますから」を聞きながら、彼の腕の中で息を引き取った。エスタと同じ墓に埋葬され、聖句「主は永久に責めることはなく、とこしえに怒り続けられることはない」のみが刻まれる。本作品に限らず効果的に聖句が引用される。「神でもない作者が、バートンが神に赦されたかどうかを明記するわけにはいかない」と著者は述べ、「神には迎えられた」という作者の信念とバートンへの愛情を象徴していると結論づける。

### 第 IV 章『ルース』 第 2 節『ルース』に描かれた転落女性問題

物語 36 章中「ルースの転落」への言及は最初の数章のみで、その後は彼女の贖罪の物語である。第 2 節(2)で「ルースの罪意識、償い、赦し」が考察される。キリスト教の罪が軽い順に「無知ゆえの罪」、「弱さによる罪」、「故意による罪」と定義される。ルースの不義の罪は、男女交際に全く無知であったわけではなく、「弱さによる罪」であるという。その後のルースは「良心の呵責」にさいなまれ、「故意による罪」は犯すべきでないと認識していると説く。「未亡人と偽った」ルースの過去が知れると、ベンスン牧師は自戒を込めて「世間の評判など取るに足りない……神が送りたいもう試練を……よろこび迎えるよう、レナードに教えるん

だ。」と論じた。ここで初めてルースは、苦しみを逃れようとする自分のために祈っていたと気づき、犯した罪をすべて神に対して認めたことになると論じる。(3)では「ルースの死の意味」が次の2段階に分けて考察される。①ルースがベリンガムの看護に行こうとした理由について、息子を「恥の子」ではなく、「神聖な男女の愛から生まれた子」と信じたいため、レナードをみごもった時のベリンガムの彼女への愛情を確認し、ベリンガムに愛情があったとすればなぜ彼女を置き去りにしたのかを知りたかったため、という。②ルースが死なねばならなかった理由について、まず代表的な3つの見解——1. ふしだらな罪を犯した女性は「社会的制裁としての死」を受けるという当時の考えに作者が配慮もしくは屈した。2. 聖女にするための殉教死。3. 神への「いけにえ」としての死——が示される。4つ目の見解として著者は、母親に守られた無垢な子ども時代に帰り、神から「赦された」と自覚するルースの「安らか」な死の背景には、作者の厳しい罪観があるという。すなわち、人間が犯した罪に対し神が与える罰を「愛の鞭」と捉え、その試練に耐えれば罪を赦されても、生きている限り、罪を犯さなかったことにはできないのである。

#### 第V章『クランフォード』 第4節『クランフォード』に見られる民主化への流れ

本作品には作者のその後を予感させる要素が含まれているが、本章は「身分階級を重視していたクランフォードの民主化」という観点で捉えられる。時代設定は、18世紀末頃から1840年代末頃までの二世代にわたる。町の淑女たちの価値観は“gentility”（身分にふさわしい上品さ）と“humanity”（人間性）に基づき、前者には厳しい「規範」が伴い、後者は「愛の実践」としてあらわされるという。町の教区牧師一家とその友人を中心に「人間性」あふれる外部からの人々が加わることで、町は徐々に変化（民主化）していく。ミス・ジェンキンズは老父の牧師職を支え、町のボス的存在とみなされるが、女性の仕事もできたので「家庭の天使」的存在と著者は考える。さらに、弟の出奔で家長的存在とはいえ真の家長たりえず、「父権制社会の犠牲者」と論じる。銀行破たんまで破産したミス・マティーは茶葉販売店を営み、思いやり深い住民に助けられて精神的にも経済的にもたくましくなる。人を責めることなく生きる「愛すべきマティー」のため、語り手メアリの機転によりピーターが成功してインドから帰る。その結果、マティーは店

をたたみ、マーサー家と同居を続け、憧れの「家庭の天使」として余生を送り、彼女の自己実現が果たされると結論づける。限定的な時代設定の中では、最善の選択肢なのであろう。しかし、キャプテンの孫娘が老ジェンキンズに『ランブラー』を読む場面では、妹が置いた『クリスマス・キャロル』を幼女は楽しんでいる。以前のマティーは「規範」遵守の姉に従ったが、この場面には「民主化の流れは歴史の必定」という作者の歴史観が凝縮されていると著者は述べる。

#### 第VI章『北と南』 第2節『北と南』のヒロインにとっての自己の存在意義と結婚

本章は教養小説として、マーガレットの18歳から22歳までを4期に分けて考察する。第1期(18歳1か月頃)ロンドンの上流ショー家での10年間の生活を終え、中流階級の生活信条を失わずに自尊心を保持したことがうかがえる。第2期(18歳1か月頃～5か月頃)ヘルストンに帰ると、国教会牧師の父親と上流出身の母親の価値観の違い、ヘンリーの求婚、父親の信仰上の告白に直面する。彼女の信仰心も揺らぐが、「祈り」によりクリスチャンとしての存在意義を確認する。第3期(18歳5か月頃～19歳10か月頃)ミルトンへの転居で生活環境は激変する。マーガレットは工場労働者のヒギンズ親子と知り合い、労働者への偏見が消える。また、父の弟子ソーントンと知り合う。彼は彼女の優雅な物腰や「白くしなやかなうなじ」に魅了されるが、彼女は気づかない。商人階層への偏見により彼の真の姿をゆがめて見ていると父親に諷められるが、彼を高慢だと思ふ。彼も彼女をそう思う。二人の関係は遅々として進まず、「握手」の場面にも反映される。彼女は重大な場面で実によく「泣く」が、「精神的安定」を得る有効な手段であると著者はいう。彼女は、フレデリックを駅で見送る場面をソーントンに目撃されるが、兄を救うため「駅へ行かなかった」と偽証し、苦境に立つ。第4期(19歳10か月頃～22歳1、2か月頃)両親亡き後、再びロンドンの家に招かれるが、なす事もなく心は飢餓状態である。駅頭での「密会」と「偽証」によりソーントンに軽蔑されているので事情を説明してほしいとベルに頼むが、実現せぬうちに彼は亡くなる。神に祈ることで瑣末なことに囚われていたことを反省し、「神の御心のままに生きる勇氣ある自分の存在」に未来を見出す、と著者は述べる。結局、ヘンリーでなくソーントンを伴侶に選んだ理由は、異性としての魅力、人間らしい感情、同じ人間観・価値観を持っていると確信したからであり、これらは

ヘンリーにはないものだと論述する。

## 第 VIII 章『シルヴィアの恋人たち』 第 2 節『シルヴィアの恋人たち』に描かれた信仰問題

作者は本作品完成までに 3 年半を要し、著者も分析に 3 年を要したという。本章のみが書下ろしであり、信仰面に焦点を当て、主要人物の罪意識と作者（「全知の視点」）の思考が考察される。時代設定が二世代前になっている。シルヴィアはキンレイドに求婚されるが、母親不在をはばかり、父親はしばらく三人の秘密にしようという。婚約の翌々日、フィリップは、キンレイドが強制徴募隊に連行されるのを目撃し、キンレイドに「シルヴィアに伝えてくれ、君が見たことを。そして戻ってきたらすぐ結婚すると」と伝言を頼まれる。フィリップは、事件は「恋敵を消してくださいと激しく祈った」からかと悩むが、「神の摂理」と受け止め、沈黙を守る。キリスト教で最も重い罪は「故意の罪」で、フィリップの罪はこれに相当すると著者はいう。クウェーカー教徒であるフィリップが、思わず事件の真相を「何かにせかされて」もらそうとする行為に作者は理解を示し、厳しい追求の態度が途中で変化していると論じる。ダニエルが放火扇動の首謀者として処刑されると、シルヴィアは愛ではなく、精神を病み始めた母と同居が可能なフィリップの求婚を受け入れ、喪服で結婚式に臨む。娘が生まれ、夫を愛し始めた頃、将校となったキンレイドが帰還し、真相が暴露される。彼女は激怒し「二度と妻として共に生活しない。」と誓う。これを境にフィリップは失踪する。感情的なシルヴィアはすぐに後悔し、教会の難解な言葉を理解するため、アリスから文字を教わる。ヘスタが夫を愛していたことを知り、被害者と思った自分がヘスタには加害者であったと悟る。一方、フィリップは海軍兵士として戦場でキンレイドを助け、自らは銃の暴発で人相も変わる大やけどのため除隊し、スティーブン・フリーマンとして帰郷する。すぐに裕福な女性と結婚したキンレイドと比較し、夫の不変の愛を実感しても、迷信深い妻は「誓いの言葉」を守らねばと思い、神でもない自分がかけた呪文に縛られている。二人は自分の行いへの審判を神に任せていないので、赦し合えるには十分な償いができていない、と論述する。ベラが散歩中に高波にさらわれ、フィリップが救助するが、岩に叩きつけられ臨終を迎える。シルヴィアは不浪人が夫であると直感し、最後に和解する。

終章では、序章の4つの研究着目点に従い、全作品でどの着目点を示されたかが検証される。作者が伝えようとしたメッセージは次の2点である。1. 自分は何のためにこの世に送られたのかを見極め、社会のために尽くし、自分のためにも生きる。これこそ神の御意思に沿った人生なのだから。2. 苦難に直面し、絶望しそうなとき、苦しみは人を成長させる愛の鞭と受けとめ、克服しよう。神は乗り越えられない試練はお与えにならないのだから。

本書を読んで、あらためてギヤスケルの厚い信仰心と彼女に寄せる著者の熱誠とをひしひしと感じた。また、性善説を信奉するユニテリアンの温かい人間観も随所に感じられた。紙幅の関係で全作品に言及できなかったこと、語りの構造、象徴その他にも触れられなかったことをお詫びする。前作同様、主要な研究書への言及、巻末の詳細な注や引用および参考文献、索引が整備され、ギヤスケル研究にとり大いに寄与することは疑いない。キリスト教とユニテリアニズムの関係をこれだけ掘り下げた文献がどのくらいあるのか、浅学の評者には不明であるが、その一点からも極めて貴重な書といえるであろう。

(山陽学園大学教授)